

## 1 樹木のささやきは私をどこに連れていくの？

## 環境園芸学部 環境園芸学科 准教授 岡島 直方

## 講座要旨

いつの頃からか、自然のささやく声が聴こえるようになりたい、と思いはじめた。

これまで様々な人々が自然について観察し、記録してきた。何気なく存在する自然は、文化的な観点からは存在しないものとして取り扱われることもある。人間の造り出してきたものだけに価値をおく考え方をすれば、それはただそこに在るだけ...、ただの自然...ということになる。それ自身がストーリーを生み出すのではない。ストーリーを生み出すのは人間なのだ。つまり、これを加工し、エネルギーを取り出したり、食べられる状態にしたり、または文字を書いたりする手段にし、その歴史が積み重なってきたところに、さらに何かを付け加えていくところに最新のイノベーションが存在するという考え方が近代的な考え方と言える。

しかしながら、ただそこに存在する自然であっても、そのままの姿としてそれは有形、無形の価値を我々に与えているはずである。長い間、自然は我々に仕え、我々が生きるためのメディアとして姿を変えられ、我々に提供されてきた。それは言ってみればシンデレラの靴である。いや、かぼちゃの馬車である。かぼちゃはかぼちゃとしての姿のまま最初は提供されていたが、いまやかぼちゃはかぼちゃの姿のまま提供されるのではなく、もっと潜伏した形で流通している。かぼちゃは抽象化してしまった。

そんな抽象化してもとの姿を留めぬようになってしまったかぼちゃを、もしくは、そのかぼちゃのアイデアを、霧のようなものにつつまれた、曖昧模糊とした世界の中から、甦らせよう。我々にとって霧の向こうに明滅するサインとして垣間見えるそれを。

わたしにとってそんなカボチャは雑木林であった。馬車になってしまったカボチャとしての雑木林から探究をはじめた。馬車になった状態のカボチャをずっと見つめ続けてきたのだが、その向こうに、未だかつて存在したことの無いカボチャの姿を見ているのである。それは「カボチャそのものはこれじゃん！」、と目の前にあるカボチャを取り出して上方に掲げるのとは少し違うような気がする。それは少なくとも「私にとっての」カボチャじゃない。そんなナイーブな感覚と付き合いながら、それでもときどきカボチャに触れているのである。



## 履 歴

- 1968年 大分県出身
- 1992年 3月 千葉大学 園芸学部 園芸経済学科卒業
- 1994年 3月 千葉大学大学院 園芸学研究科 造園学専攻修了
- 1997年 9月 千葉大学大学院 自然科学研究科 緑地設計学専攻修了、博士(学術)取得
- 2001年 3月 名古屋工業大学 社会開発工学科、建築学専攻卒業
- 2001年 4月 南九州大学 園芸学部 造園学科 専任講師
- 2010年 4月 南九州大学 環境園芸学部 造園学科 准教授

南九州大学  
担当科目

基礎製図実習、環境園芸実験実習、造園緑地実習、造園経営論、環境哲学、建築学概論、コンピュータ/CAD演習